



モグの山のぼり



にし はる

くまのモグのお母さんが、びょうきになりました。

びょういんに行って、おくすりをもらったけれど、なかなかよくなりません。

モグのお父さんは、「だいじょうぶだよ。モグ。すぐによくなるから。」とはげましてくれたけれど、モグはしんぱいでしかたありません。

いつも、たいようのようにあかるかったお母さんが、ベッドの中でうんうんうなっているのを聞くと、しんぱいで、むねがはちきれそうでした。

この夏休みは、かぞくで海へあそびに行くことになっていました。モグは海を見たことがありません。だから、とつてもたのしみにしていました。

お母さんは、もともと海のある町でうまれたので、海が大すきで、かぞく3人であそびに行くことをたのしみにしていました。

お母さんは、よく言っていました。

「お母さんがこどものころ、学校がおわったら、友だちみんなと海に行って、いっぱいあそんだのよ。お母さんは、きれいな貝がらを見つけるのがとくだったの。いつだったか、にじ色の大きなまき貝を見つけたんだけど、それを耳にあてるとね、なみの音が聞こえたのよ。モグにもいつか見せてあげたいな。」

モグは、お母さんの海のおはなしが大すきでした。その大きなまき貝をいつか見てみたいと思っていました。だから、海に行くのがとつてもたのしみだったのです。

ある日、モグは思いました。

「なみの音が聞こえる、にじ色の大きなまき貝をお母さんに見せてあげたら、きっとげんきになる！」

モグは海に行くことに決めました。

お父さんはおしごとがいそがしいから、ひとりで行くことにしました。

そんなことを言ったら、お父さんもお母さんもしんぱいして、とめるにきまっているから、ないしょにしていました。

ある朝、モグは「ちょっとあそびに行ってくる。」と言って、海へむけてしゅっぱつしました。

海に行ったことはないけれど、おかをのぼる道が海につながっていることは、していました。それで、まずはおかをのぼりました。

「よいしょ、よいしょ。このおかのむこうに海があるんだ。このおかなら、いつも友だちとのぼってあそんでいるから、らくしょうさ。」

そして、おかのてっぺんまでのぼりました。

海が見えるかなと思って、おかのてっぺんから見てみたけれど、海なんて見えません。

それどころか、このおかよりももっと高い山がありました。おかの道からいっぼん道で、その山につづいています。

「あの山をのぼらないと、海に行けないんだな。よし、あの山をのぼろう。」

モグは、あせをふいて、すいとうのお水をのんで、おかのてっぺんをしゅっぱつしました。

その山にのぼるのは、はじめてです。とちゅう、木がたおれていたり、石だんがくずれていたりして

、こけそうになったりしました。高い山なので、のぼってもものぼっても、てっぺんが見えてきません。

「お母さんに、まき貝を見せてあげるんだ。こんな山、ぜったいにのぼってやるぞ。」

モグは、じぶんをはげましながら、その山をいっぽいっぽ、のぼっていきました。

そのうち、山をのぼるコツをつかんできました。じょうぶな木のぼうをつえにすると、すこしらくなことがわかりました。りょう手につえをもって、「うんしょ、うんしょ。」とのぼりました。

すると、うっそうとした木のあいだをぬけて、山のてっぺんが、もうすぐそこに見えました。

「やった、てっぺんだ。あそこまでのぼれば、海が見えるぞ。」

モグは、うれしくて、すこしスピードアップしてのぼりました。

そして、とうとう、てっぺんにつきました。

ところが、

「あれ、海が見えない！」

なんと、やっとのぼったその山からも、海は見えませんでした。

それどころか、いまのぼった山よりも、もっと高い山がそびえていたのです。

「そんな…。ぼく、もううごけないよ…。」

モグは、そのばにすわりこんでしまいました。

すると、てっぺんにある山ごやのしゅじんが出てきました。

「おや、こんなところまで、ひとりでのぼってきたのかい。かんしん、かんしん。」

モグは、そのしゅじんに聞きました。

「ぼく、海へ行きたいんです。どうすれば、海に行けますか。」

「ほお、海まで行くのか。それなら、あの山をのぼれば海につくよ。でも、あの山は高いからね。」

「やっぱり、あの山ものぼらなければいけないんだ...。」

「そうだよ。でも、この山をのぼって、だいぶ山のぼりがじょうずになっただろう。2本のつえもじょうずにつかっているようだし。つぎの山でもやくにたつよ。」

モグは、「もう、ぼくにはムリだ。こんなにつかれているし。」と思いました。

でもそのとき、ふとお母さんのかおが思いうかびました。それは、にじ色の大きなまき貝を耳にあててよろこんでいる、お母さんのかおでした。

「そうだ。ぼくは、お母さんのために海へ行かなくちゃ。」

モグは、からっぽになったすいとうにお水をいれてもらって、つぎの山へむけてしゅっぱつしました。

その山は、さっきのぼった山道よりも、とてもきゅうでした。2本のつえがずいぶんやくにたちました。

がけのようにきりたったところや、石ころにおおわれて道がよくわからないところ、ぬまになってベチャベチャしてすべるところなど、いままであるいたことのないような、きけんな山道がつづいていました。

でもモグは、あきらめずにいっぽいっぽ、目のまえにつづく道を、いっしょうけんめいのぼりました

。「うんしょ、うんしょ。

この山をこえれば、海に行ける。がんばるぞ！」

そしてとうとう、山のとっぺんにつきました。

すると、そこからは、モグにとって、はじめての海が広がっているのが見えました。

「わあ！海って大きいなあ！すごいなあ！」

モグは、うれしくて、ころげるように山をおりて、海へ行きました。

そして、さっそく貝がらをさがしました。大きいの、小さいの、きれいなもの、おもしろいの、いろいろありました。

その中で、ひときわめだっている貝がらがありました。

「あ、あれだ！にじ色の大きなまき貝！」

モグは、それをひろってさっそく耳へあててみました。ザザアーッザザアーッと、なみの音が聞こえました。

「すごい！ほんとうになみの音が聞こえる！これなら、お母さんよろこぶぞ！」

モグはそのまき貝をだいにカバンにしまって、もときた道を、家へといそぎました。

「ただいまあー」

モグは、なるべくいつもとおなじようすで、家にはいりました。

でも、いきはずんでいたし、ふくはどろだらけ、そして、かおはよろこびで赤くなっていました。

「どうしたんだ、モグ。きょうはずいぶんたのしくあそんできたんだな？」

お父さんが、ふしぎがって聞きました。

「うん。お父さん。ぼく、さいこうにたのしいきもちだよ。」

そして、カバンの中から、まき貝をとりだして、お父さんに見せました。

「ほら！お父さん。」

「モグ！まさか海まで行ったのか？」

「うん、ぼく、お母さんをよろこばせたくて、ひとりで海へ行ってきたんだ。」

「そうだったのか。えらいぞ、モグ！さっそくお母さんに見せてあげよう。」

モグとお父さんは、お母さんのへやに行きました。

「お母さん。はい！」

モグは、お母さんにまき貝を見せてあげました。

するとお母さんは、目をまんまるくしておどろきました。

「まあ！このまき貝、どうしたの？」

「ぼく、きょう、ひとりで海へ行ってきたんだよ。」

「まあ！まあ！ひとりで？」

「うん。そんなことより、お母さん、はやく耳にあててみて。」

モグのお母さんは、大きなまき貝を、耳にあてて目をとじました。

「まあ、ザザアーッザザアーッって、なみの音が聞こえるわ！まるで海にきたみたい！」

お母さんのかお色が、ひさしぶりによくなりました。

「モグ、お母さんのために、ひとりで海へ行ってくれたのね。ありがとう。

お母さん、なんだかとてもげんきになったわ。」

その日から、お母さんのびょうきは、めきめきとよくなりました。

ある朝、モグがおきると、なつかしいにおいがしました。お母さんのやいたパンのにおいでした。

モグはとびおきて、キッチンへ行きました。すると、お母さんがキッチンに立って、朝ごはんのじゅんぴをしていました。

「お母さん！びょうきがなおったの？」

「ええ、モグ。あのまき貝のおかげで、海の音をまいにち聞いて、お母さん、げんきになったわ。」

「やったー、お母さん！」

モグは大よろこび。

山のぼりはたいへんだったけど、がんばってのぼって、ほんとうによかったと思いました。